

【書 評】

雲 和 広

『ロシア人口の歴史と現在』

岩波書店 2014.2 xxi+173 ページ

ロシア連邦にはソ連時代から数多くの人口問題が存在している。具体的には、出生率の低下、死亡率の増加、民族によるアンバランスな人口増加、地域間の人口移動等である。しかし、人口論に関する研究の蓄積は少なく、研究者層も薄く、経済教育において人口論・人口問題に関する科目は不足している。1990年代に入り情報の公開、マイクロデータの出現、人口問題への社会的関心の高まりによってロシア人口に関する研究は大きく発展した。またロシアにおける経済学教育現場にも変化が始まった。主なロシアの大学は人口論(демография—МГУ, МГИМО, ВШЭ, СПбГУ他)に関する科目を開講するようになったが、今でもロシア経済論の総合教科書においては、人口問題は無視されているといっても過言ではない。2000年代に出版された四つの有名な教科書(Ясин, 2002; Кудров, 2008; Нуреев 2008; Булатов, 2012)で人口問題及び人口危機について説明したのは一つのみであり、それも僅か3ページの短いものであった(Булатов, 2012)。

つまりロシア人口論の理論研究は進歩しているが、この成果は経済学の教育過程に伝わっていないといえる。その一つの理由としては人口問題を総合的に分析している著作が少ないことが挙げられる。これに対して、雲和広の一連の研究はこの不足を補っている。以前の著作(雲, 2003)ではソ連の労働力の移動は歴史的な観点から評価されていた。本書は主要なテーマを人口問題に移し、今まで不足していた歴史統計の紹介、幅広い先行研究の分析及び詳細な計量的手法にもとづき、ロシアの人口問題を綿密に研究しており、ロシア経済の理解を深めるための貴重な総合研究成果となっている。これはロシア経済論に関する説得力のある講座を作成する際、ロシア経済の重要な特徴を表現する不可欠な一部になることだろう。

本書の特徴は帝政ロシアの時代から始めて、ロシ

ア人口の膨大なデータを分析し、現代ロシアの人口動向を低出生率・高死亡率とその原因という観点から考察して、地域間の人口再分配を検討していることである。ロシア人口の推移とその要因に焦点を合わせつつ、本書は以下より構成されている。

「第1章 ロシアの長期人口動態」(pp. 1-38)ではロシア人口の歴史統計の分析がなされている。筆者はロシア帝国・ソ連・ロシア連邦の人口統計制度の変容を確認し、長期人口系列データの構築を目標としている。結果として1867年～2002年の総人口・出生数・死亡数・幼児死亡数及びその比率が明らかになっている。

「第2章 低出生率とその要因—マイクロデータ分析」(pp. 39-83)においては出生率変動に対する社会経済的要因、特に家計所得、教育水準、家族構成、住宅状況、就業状況、生活の満足度、地域の特色について考察している。1995～2004年のロシア長期モニタリング調査(RLMS, ラウンド6～13)のデータを基にした計量分析の結果、ロシアにおける個人の所得水準と出生確率は単線的な関係を有しないことが確認される。つまり、相対的に高学歴を有する女性は出生の可能性が高いのである。このように教育水準が出生率を上昇させる現象は、国際比較の側面から見れば珍しいものであり、ロシアの社会経済情勢の特色が現れている。それはつまり1990年代の社会的混乱及び急速な所得低下の環境で、教育水準が所得の高さを直接説明するようになったのである(著者の言葉で言えば「代理変数となった」)。

「第3章 高死亡率とその推移—メタ分析」(pp. 85-112)は英文の先行研究を検討し、医学的な側面から高死亡率の要因を明らかにしている。先行研究においては医療水準、環境汚染、統計信頼性、アルコール消費などが指摘されるが、その中でも本章の分析はアルコール問題に集中している。メタ分析の結果はアルコールの過剰消費は死亡率を上昇させると示している。このことはマクロデータによる研究(アルコール消費量と自殺率)およびマイクロデータによる研究(不適切なアルコール消費パターンと死亡率)にも確認される。

「第4章 地域間の人口配置—ロシア連邦政府内部資料の分析」(pp. 113-141)の焦点は地域間の距離・地域の人口規模を考慮した人口移動の要因分析である。著者は2003年のロシア連邦を構成する89

地域間の人口流出・流入マトリックス(Origin-to-Destination, OD表)及び地域特性を表すデータを利用し、重力モデルを適用している。ソ連時代には固有の特徴を有していたロシアの地域間人口移動に対し、一般的な分析手法の適用可能性を確かめたことが移行過程を示している。ソ連時代と異なって地域間の距離、出立地・帰着地の人口規模、インフラストラクチャー整備度は重要な決定要因となっている。また、人口集積が進んだ地域では将来的に累積的な効果があらわれ、さらなる人口流入が予測されている。加えて、現代ロシアの地域間人口移動のもう一つ重要な決定要因になっているのは石油・天然ガス産出であり、この影響はこれからも長期に渡って有効となる。上記の要因に基づいた人口の再分配は東部・極北地域における社会基盤維持負担の軽減及び先進地域・重点開発地域の発展に繋がる可能性がある。

最後に、「結語に代えて」(pp.143-151)ではロシアを巡る国際人口移動が紹介され、旧ソ連諸国による労働力の流入は新たな社会問題の原因になりうるが、人口減少の対策には不十分であると結論付けられている。つまり、近い将来におけるロシアの人口動態は国内要因が決め手を握るのである。人口ピラミッドが示すように、ソ連崩壊直後から見られた出生率の劇的低下が2010年代半ば以降に入ってから20~30年間にロシア出生動態を決定することが見込まれており、この見通しを覆すことは極めて困難であろう。

以上は評者による本書の概要である。評者が本書を読むうえで、自然に関心が向かった三点、データ、手法、政策的含意について詳しく述べることにしよう。第一に、本書の分析は膨大なデータに基づいている。第1章では1867年~2002年のロシア人口・出生率・死亡率の歴史的統計が本書で初めて発表され、今まででもっとも詳しい系列表が記された(pp.24-26)。一部のデータは不足しているが(特に1915年~1924年)、ロシア連邦領域の変更にあわせた人口系列表の作成は本書の重要な成果になっている。第2章では低出生率の要因の研究でマイクロデータが利用され、信頼性が高い結論が出されている。第3章の先行研究のメタ分析では200件以上の学術論文が参照されており、社会分野だけではなく、医学・環境汚染に関する研究の成果までもが紹介されている。第4章でも著者がロシア連邦政府の内部の資料を手に入れ、それに基づいた分析が行われている。

参考文献として三か国語の約250本が使われている。歴史的統計の掘り出し、幅広い先行研究の検索・加工、独自データの利用は本研究の説得力及び結論の信頼性を高めており、高く評価すべき点である。

第二に、本書は研究課題及び資料の特色に合わせ、それぞれに適切な分析手法を適応している。第1章では著者がアーカイブの資料を丁寧に探り、ロシア地理・行政区分の変動を確認し、人口系列表を作成した。第2章のマイクロデータは回帰分析、第3章の先行研究はメタ分析、第4章のOD表は回帰分析によって研究されている。適切な分析手法の選択、数量分析の厳正なテクニック、精密な分析結果の表示は人口統計的なデータ作成・加工・分析の手本とすべきものである。

第三に、本書では極めて客観的なロシアの人口問題の研究が行われており、政策的含意は反映されていない。この理由としては、低出生率の改善にしても、高死亡率の改善にしても、海外から移民の編入にしても、すべての問題は複合的な性格を持ち、単純な解決方法は存在しないということを指摘できる。2000年代の後半から、ロシア政府は出産増加への刺激、医療サービスの改善、海外移民の受け入れなどの政策を積極的に執行しているが、これらの政策の限界は本書の分析から明らかになっている。出生率向上政策は出生確率と個人所得との非単線的な関係及び年齢別構成の変更による出産可能年齢女性数の減少の問題に阻まれている。高死亡率の対策推進は医療制度の問題、非健康的な生活方式、財源不足により停滞している。移民のロシア社会編入は外国人嫌悪の可能性、移民集中地域における社会インフラの未整備などの理由で困難である。これを考慮すると、著者のロシア人口動態予測の悲観論には科学的な根拠があるといえる。

ロシアにとって人口動態の「苦い真実」は納得が難しいことである。ロシア統計局は2031年までの人口推計はバリエントによって①1億3284万人、②1億4319万人、③1億5296万人となっている(Poccrat, 2014)。本書の観点から②・③のバリエントは現実的ではないと言える。しかし、ロシアにとって人口問題の重要性を考えれば、人口減少の純化・逆転の可能性があるのか、出生率の増加及び外国移民の受け入れはどこまで実行できるのか、そのために必要なコストをどのように評価するのかという問題は自然的に出てくる。この問題は遥かに本書の範囲を超えているが、今後の研究テーマになって

欲しい。

最後に本書をもう一度全体的に概観する。ユニークな歴史統計の掘り出し、豊かな統計資料の活用、精密な計量的分析、幅広い先行研究の整理及び分析、出生率・死亡率・人口移動の総合分析などの本書の特長に、評者は深くポジティブな印象を覚えた。本書は経済学的なロシアの人口問題研究への大きな貢献であり、ロシア経済学において人口論の講座を作成する際の基礎ともなり得る意味で高く評価できる。

参 考 文 献

- 雲 和広(2003年)『ソ連・ロシアにおける地域開発と人口移動——経済地理学的アプローチ——』大学教育出版, 189 ページ。
- Булатов А. (2012) Национальная экономика. Магистр. 304 с.
- Кудров В. (2008) Национальная экономика России. Дело. 544 с.
- Нуреев Р. и др. (2008) Национальная экономика. Российская экономическая академия им. Г. В. Плеханова. 695 с.
- Росстат (2014) Демографический прогноз до 2031 г. www.gks.ru
- Ясин Е. (2002) Российская экономика. ГУ ВШЭ. 435 с.

[Andrey Belov]